

『篁物語』の総合的研究（3）

中村 一夫（日本語学・文学科）
松野 彩（日本文学・文学科）
仁藤 智子（歴史学・史学地理学科）

〈経緯と現状〉

2016年春以降、実在の人物をモチーフに物語として後世まで語り継がれている文学作品（虚構物語）のひとつとして『篁物語』を取り上げて、日本文学・日本語学・日本史学の視点から共同研究を積み重ねてきた。具体的には、写本間の異同の分析を通じたテキスト研究と本文校訂、それに基づいた解釈、成立期の社会情勢や人物関係など歴史的背景を明らかにしてきた。現在は、『篁物語』の成立年代と筆写活動およびその伝来過程、テキストとしての『篁物語』の特質を中心に研究を進めている。その成果の一部は『国士館人文学』7号（2017年3月）・8号（2018年3月）の紙面に公開している。

〈題材〉

『篁物語』とは、平安時代実在の人物である小野篁（802~852）を主人公とした歌物語である。成立は未詳で、平安中期から鎌倉室町期まで、諸説がある。現存する伝本は、江戸時代初期より遡らないとされる書陵部本、彰考館甲本、同乙本（原本焼失、転写本が残る）の三本と、鎌倉時代後期に書写されたと考えられる承空本である。近年、承空本が『冷泉家時雨亭叢書』に収載されたことで、この作品の成立年代と伝本、本文の研究に新たな展開が見られるようになった。

〈成果と課題〉

今年度の成果の一部は、各自の小論に譲ることにしたいが、概略を述べる。

中村は、日本語学の立場から、2016年度は主に漢字の使用状況を調査し、『篁物語』の四本の伝本の本文のありようとそれらの相対的な関係性を探り、新出の承空本と書陵部本の近い関係を明確にした。また彰考館本群と承空本・書陵部本群の二つのグループに分類することが適当であることを指摘した。2017年度は、最も書写年代の古い承空本による校訂本文の作成を試みた。『篁物語』は主に江戸初期に書写された『篁物語』枅形本（彰考館蔵・甲本）によって読まれてきた。しかしながら、2002年に公開された承空本はそれよりも早く鎌倉時代後期に写されたものであり、両者は近い本文を有するものの、なお細部には検討すべき相違点が存在する。そこで承空本の読解に裨益するものとすべく、これを底本とする校訂本文を作成した。今年度は、承空本の本文を調査・考察するにあたり、前年度にものした校訂本文を基礎とする語彙表と総索引の作成を行った。

これによって、より精密に本文の質（他の伝本との相対的な距離や関係性、本文の時代的特質など）を伺うことができるだろう。

松野は、中古文学の立場から、注釈書の本文・注釈書を丹念に比較し、新たな本文校訂・解釈の可能性を見いだそうとしている。また、同時に成立時期についても検討を行っている。2016年度は「角筆」に着目し、その用例から『篁物語』の成立時期を平安後期の11世紀末以降であることを検証した。2017年度は「搔練」に注目して検討を行い、用例調査から平安末期の12世紀末までが妥当であるという結果を得た。したがって、この2年間の研究成果によると、『篁物語』の成立時期は平安後期（11世紀末）～平安末期（12世紀末）の約100年の間になる。今年度は『篁物語』の「橡の衣」を含む衣装描写の持つ意味について検討した。調査対象は仮名作品にとどまってしまったが、「橡の衣」の用例の分布状況を確認すると、上代から中古まで、最も新しい例は『栄花物語』（12世紀初頭までに成立）であり、過去2年間の研究で検討してきた成立時期からはずれていない。今後も、1つ1つの言葉を丁寧に分析していくことによって、成立時期の特定も進めていく予定である。

仁藤は、歴史学の立場から、2016年度は史料に散見する篁関係記事を整理し、平安時代の学識豊かな官人として、二人の東宮・恒貞と道康に学士として仕えた篁の姿を明らかにした。2017年度は『篁物語』の舞台に「稻荷詣」が選ばれたこととその時代性について注目した。稻荷（神）社が人々の参詣の対象となるのは11世紀以降であることから、『篁物語』のこの段の成立時期は11世紀以降といえ、松野の研究成果と合致することを示した。今年度は、承空の歌書筆写活動に目を向けた。承空は、有力御家人宇都宮頼綱の孫で、藤原（二条）為氏とは従兄弟にあたり、宇都宮歌壇と京都歌壇との交流が背景となる。承空本を含む西山本には、鎌倉後期に、浄土宗の西山往生院において、藤原資経（甘露寺資経とは別人）から借用して筆写した歌書が多数ある。これら西山本は承空の死を契機に二条家へ寄進、その後に冷泉家に移管されたと想定される。中村が以前から指摘しているように、承空本を江戸時代に書写したものが書陵部本である見通しも立った。

研究を進めていくうえで、いくつかの解明すべき課題も明らかになってきた。

第一に、成立過程の解明である。成立時期は11世紀末から12世紀末に絞られてきた。第一部と第二部の構成の落ち着きのなさは、成立が異なる可能性がある。他作品との影響関係の中で位置づけていきたい。第二に、承空本を含む西山本（カタカナ）と書陵部本（ひらがな）における表記や語種の解析である。第三に、鎌倉後期における西山、あるいは藤原資経の書写活動の社会的意味である。どのような歌書が選ばれ、誰が何のために書写したのか。

最終的には、小野篁に仮託してどのように『篁物語』が成立し、今日の形に落ち着いて伝来してきたのか、成立と伝来過程を明らかにすることを目的としたい。